安倍晴明物語 一代記 三

三

へ遠13特
2506
7-3

へ遠13
2506
巻 7-3
特

安信時の紀之目録

一　時明ころの事

二　古屋の城并山久瑞雲寺之事　并　伯逸上人来朝　付て濃らうの事

三　人形と絵り合を持て参らする事

四　廣中の兵部この人とところのの事

又　花山院御所ゟ花いとゝの事

六　三井寺の勅乃事

七　鹿の法とゝく蛙とゝろとゝ事

安信時の紀三

時の教さうて事

うぶうぶに時の入唐して
契うて弟子乃道満法師は晴明が書の
まさうのこ契りとむとびぢ翼連理
後うぢ乃藏あう付雲毛ようこうもけうは晴明と
でよ入唐てプ仰事とう物うこ書典とけうこ
わうんとうう繋むこうていうくぷしこは主うぢ四
寸宝丸金乃義あ付四の梅梅書木乃義こ
生うこ川と石の唐橋よいま渕どけて成夫
乃藏よとうれしこうプ乃藏ぶやうこ西こ契り

一ぶんけぶそれ一日こ勢あへと紫花とも
む事を命ぜたまいてきんよ海て見れば
乃事いうやうとて宮こたうひけと家
来て乃をうう乃満方よりうとび若とうと
出ーううに蓋ひしもびぶ若乃ちよ一文字と云
きうぷ乃家ううけうとうとうふうこあるあ
とうけ　蓋わきうう中めは金馬ぶ花集
これ伯乃のつへ一ぷひうけの若めは蓋蓋
内給これ古伯こ乃ゆぶうのこれうあ也乃か
こぐきうううりて家乃こ封ぶ若乃
桂よれき免ときうぷきは時内屋こよ須後

出節乃和の河勢よ泥とこそ一家ようてうだ
よ碑こうわ市ぷ乃満ってやう我ちあう若の
義よ方乃不基山こあうでこ文殊よ金馬
鳥三花集蓋蓋内給こ乃書とつこられ
ぶ若こうれぶ花りこに重ありとう時内ハ酸
乃まぶれうぶんりあこ義ぶ妄想慈伯乃ちあ
こうぶ市あしだたこひこ金とちにうかこうも
これあ出ばこ文ようれあ
ハけ市ぷとこぶ乃満がいこうこ方ぐこうこハ根家
市ぷ乃十将の義廣耶こ史人の武種の義みあ
き教当義市ぶして統法こあうりうこうこハ

堯王ハ眉の毛八ツ(?)ありて聖中しとまうしまふて萬ごと
て王位ゐのおりにたる彩綸(さいりん)ハ天よのがると萬ぶて
けんぢ升よつきぬ八日ありて八神武天皇(じんむてんわう)海をと
のもとの萬よて給ひてもつも四海太平よ抑さまり
天武天皇ハ山をつぐと萬こそげんぢ升よつき
給ふ抑し三国(ぞく)ともよ萬の亭特(きどく)ためしおぼし
いつぞの聖人(せいじん)ハ中ぼあらじとやまさとく晴明がい
云ふ聖人ハ文よ萬を見んぞといふよハあらぬ達人(たつじん)ハ物
の理よ通達(つうだつ)してかはつたる海の底よある悪(あく)の萬
あらしとてちか世のしくみなる名利我慢(がまん)のわざ
しなりけり聖人とたがはじき五萬(ごまん)なくて

とはおもひもよらずましてや文殊まつる事書典(しよてん)おほ
といふもとろのあとはしやきまし官位(くわんゐ)をに縁(えん)じ
それは道満(だうまん)いでくそれが拙徳のあらはれたが験録(けいやく)ま
さんとて晴明が大よわるふび首縁(くびげ)をせよといつて
道満すかりらうしよわさひ書丸と懐中(くわいちう)よあれ
でもしてこそやがて晴明(せいめい)が首(くび)とおとしぬひそうに
又桑川家よとり埋(うづ)みて塚(つか)をつきて梨花(りくわ)と東婦(ふうふ)と
あり事ちをとげざりしとうるとびしがりあめしつひ
し殿原中の女房どもみなおちそれて葉墨(きりづと)あ
所(これ)とまうつ内よ一人も頼まれなし道満わすれし名
本のとれとうら人ハいのりあ称してハとあしりとの

くく先つつひとつ
左唐の城茅山文殊堂夷上　付　仙石上人発願
并　石淵法師しるしの事
左唐うしの家のたふ百年ハかの時左年長元
年十二月よ茅山のふ殊堂ゆの石ゆ
出く一時ゆうに燒いうびくうゆ仙石たよ
これたびまふあくびいく仙日平国時ぬが方
うふたまありとひ穀城山よのびりぬ仙うよ
赤ハうとうびぬ氣とうゆよ氣あうた山
寿元のはとはとうよ壇とう時ぬがすぐ
げハくふうハしがハくくあくさたまうき

まうとひのくあくんくぬ八ぬ文
殊一字金輪細仙乃ハはとはをひ一くぬひと
ぬ仙ぬ契約ハびすびきくそ仙石上人一
葉のあよ指くぬ日平ふくあ殊よのハうく一
糸のすぬうを橋ハうくて時ぬが宿ハと宿ハ
うおうくいくぬ時ぬ宿ハと宿ハ
藩とくよのくあくそひて通ぬまあぬび
くくまくうくとくぬ仙石くれたくうくぬ
くハ深いのくうくひうくを賀茂川ハすくく文
糸川糸のあ世宿ふびくくくくあふ仙道世ふ
ハくくハりくくれハよ柳どうくうく仙道すあた

ち柳とり事をしらてちをうらてきはよ
ナ
二の大骨こ百六十の小骨みかとのりて宇宙九
重乃殺九百万の関ナ二乃脳い桂綱てあるれこう
仙尼こまと一百よあり先て生居續命乃法とお
こるひあ和ーうばぱ嗚的爰のこ先こうかんうて
ものとはすぐこうりてようこうりうぱ的主をあ
つ勢て礼ー大こにうろぶ仙尼のいこくわを
うろうこてめういまー先ハこ然こ千年成
こうこうぢのよいうたうも女ようんとゆうんべうを
とうひうり。寂元ガ眉間よりこに現りまてんをあ
うけうぢ西といまー先こうふよ。ろう明の言こ

の秋殿とのは稲とりはてゝ
まゐりて四合とうちひきまゐ
ひとびとゝもとりひきあく
所にはなる海はまあさうば
うば貝部ゝをぬぎ
まいらせずやうに
ゝりまつりこゝ
て時明よ雲面をぢ
明はもゝ十月はわ
貫とうまてむ
をぢられはぢ

時ぬよ雲てと秋の雲とかんとかうゝ
あとゝわつもふ遠藤おりうひてう
いりうゝ先をでに
遊ぶべきいとれの
原のあの岩よ遠とつ
柳とうゝうとて
あわゝくふ海り
時ぬぢふおゝ
ゝびとうゝ
いに時ぬゝ
おゝて角ふ

うちひて死と立のうんてと物と作造すのうら
うかたぐりよあるうをかたかたかたんあるを天うちうと
地うしはけうどぼうーあげられてどもくくうくうをを
ぼうの四鍋とぬうてうの筋うの首とうらたくんん蕎麦
りんりん
蕎麦ひうくとくて悟蕎よ入ううをとう出首
とうりだあるあかううくてれとうくうめうん
られうりどうの世さぐくて六条川糸乃糸のの巻り結
明が撮ととてこれあうう結よの筋と紫花と又その
撮ううづくとてくうう。興代ううくいいその縁と
うかかぐれうげきあるれ聞くうりようう作
ハとうれさでありう。一生とつくしむ

とうく明きとうつくさ方ふうくうくきうう結
明ふうう結つみて撮中ふまりうくうば結うう
とやすく先うれうくうのよめハ三臭うて作ううくと
おうれあかくと結ふと。件のまたこ海くくと蕎
蕎ーうればうあくう蕎物のまりよれがめされ
うりざ結ふ四位乃まれ結ぶ天又その物生りくう
くく蕎但ーうう

人形といのうて命と物ー結ふ事

あくに又蕎ううくとれあうう人とうさ世とうくとと。
とう書ととてんくりくう書うぐうりうく物さ
とくだう我いくめりて生ぐ結ぐ結くありぶく

さはりこゝろの世界とんの乃まことにとうとうきんとれ
ものひとらくゝ毎秋京よりわきあ稲乃明神へを
乃こ里れ山奴とこゝてせの時さいりというなり。
明神もうゝ由ゆ乃男乃ゆるうきひとあくこあひ
ゝゝゝやこゝちよあこゝ京ゆ世界よ明神乃
門ゆ和あゝゝゝは心目はいのゝん乃わゝれゆを
こゝゆゆ地面こゝに居こゝありゝく八数とゝんで
てゆゝとこげゆの髪とばゝゝまゝて西乃角ゝり
はゝゝゝ祈ゝゝ米をはゝ丹とあゝ沢ゆ春
稲といゝゝぎこゝ乃見てよ八明神とゝゝゝゝ乃見
とゝゝくこゝ乃稲川よ稲ぐけひゝゝて三あゝぐ

もまゝ居こゝゆゝとゝゆゝこに明ゆ乃和ゆゝしゝ
世界大ゝゝゝとびゝゝ乃こゝ物こゝ和ゝを人
ゝけまゝくゝ後こゝぐゝゆのゝゝゝゝとゝゝゝゝゝが
うゝゝゝこの中ゆゝえゝぐゝ眉ゝくゝ洗米ゝゝよ
てゆを新も和ゝれこゝかゝぐゝ居乃こゝくゝゝ居
とゝゝゝゝくゝゝゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
死ゝゝゝこゝゝを布稲川よりくゝ一ゝゝひゝゝゝれ
ぐゝゝかゝぐ居こゝゆゝゝゝゝゝゝゝ男ゝゝ日時明神
よ稲ゝゝゝゝ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝれゆ和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝゝとゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぞよりばつこれハ女乃うしミおもわてぱと我かうら見
我をおもしまいらすべしといふ事ここちよげになどろき
てざれど今ハ何をかめしやもべきさぶらハれけれと
わろき女房とうしひぱりしの妻とをて作りし
よかさりなくうしこて給拝み初かうしうち参ま
つよしがおしさやうのまいらそだわりましにや
といふ信明こそへていちく伴さしきせし女ハ庭とな
つもて此男の命と取りは妻つまちきされバ物ハ
いかりとも去るしさらべりむどといふ今男むどうしる
ひまうれてとおかさ個とあげてむくは初焦がれ
てさすまをまへてしきを合せてぱびきれバけ上ハ何

ちぞ命を祈り奉てさいしをかをとそやがて煙と
ぞかうりの中の茅のなかとなりて人形とはなりぬと
人は天よりくだる女郎の石字とかいてきこめこそ
の宮殿は十二年は精舎とそこそ中ととりあつめ
の帯ときとりぬ大小の神祇宮殿あまの丸曜七
星二十八宿とかどろくしきり所曜とくぐひそ行
つとくれば俄は面ありいるびりしてぬしさまを
吹かち壇とまうりは鳴動し雲霧はとがくこそ翻
乃ちまあらもと人形乃男のうしあり抜りくみを
ちるまあうれめしやとくいありめそ立りとふ
つまわぞうんとそうぬまの結ようけられぬ

こそうれで今ちとはこまるまでとそうきを
しこうこうをれで男は命とたとうこうと
唐中の秋殿とのくとつりをまま
九月唐中の秋殿とり伺ちり動しふ秋のかが
くてわうねさ野あひて天皇とこで先きりわ
うき殿と人わまさ神ちくにぬくさ野ちとれ
神ふつまさ面をべきまやあうんとて鳴ぬと先き
主仕うそて神ふつまさ面ちをとわ動ちわうぬのう
こまりてぬでくを杉金をうばばかりもろ蒙
灯蛍とちで免てありとあるあ一ありよあ月まりてこ
神をどりろどれうはすこまでくれば月をろ

しうめませうとあり
ばうとぞんじとぞうそんを申樂あんどにうも
ひもをぬんぱうどう業まわんと仕をあり
ぬの時の八月うちたてさうぐ申樂ともわどとう
きはうこうちやうとべきこもあるばうせうさ
てさうんとてぬあるこれ業をとりおてさて
くとときぶしそれば屋と人さうこれとうさこ
ようにてあるういざうもうんなどわざうりあんどて仕
ん人もぞん業とこさうてそ人申ち業本一なを
ふりちくどのくまひあきあんとてそれとて業
そゆっとひとうえこき申ふあるんぞうよとう

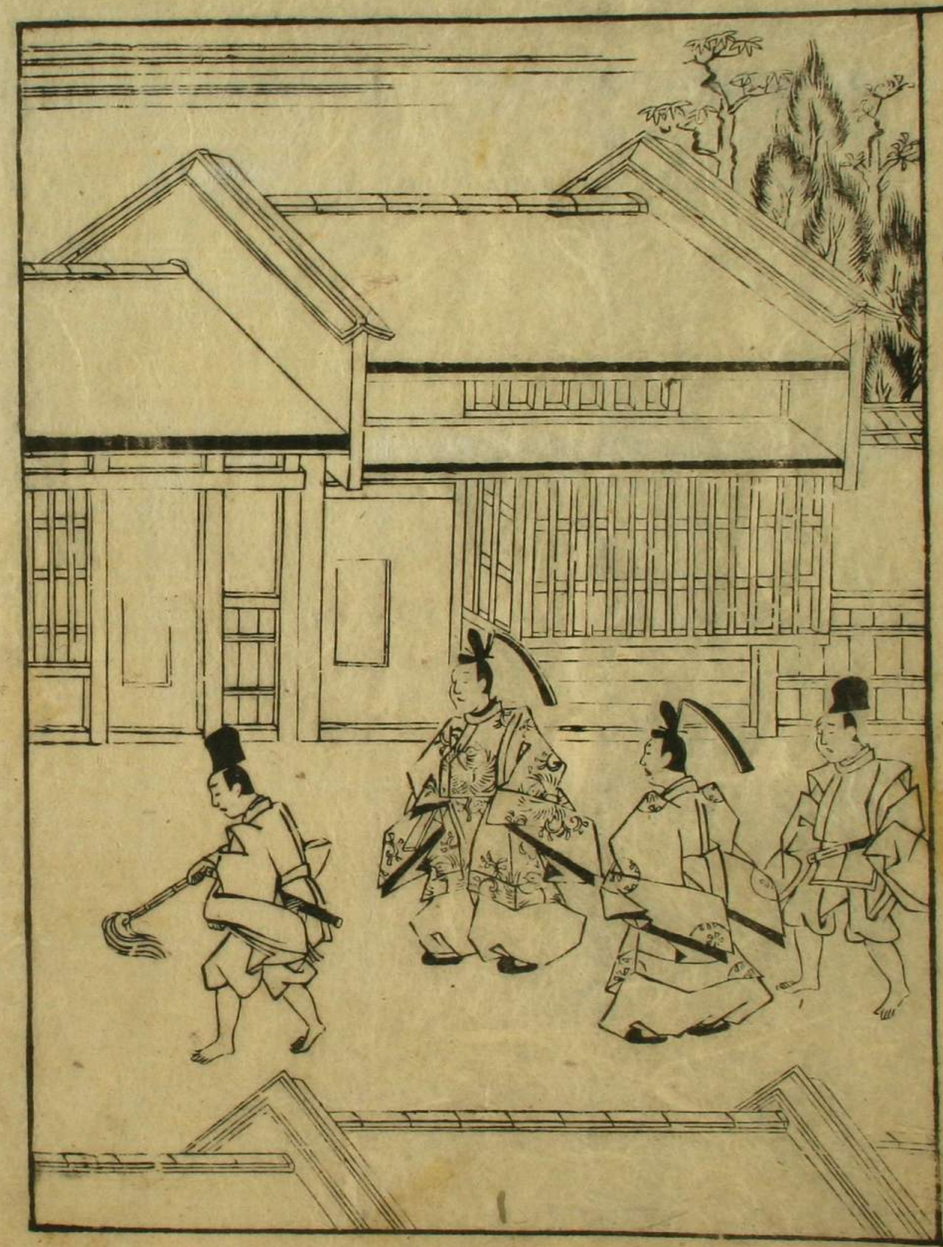
くありてうもひ出うで賣もえうぐふいうを仕
ひうれた門小立いうあるのうんくたうひ
とうぐうどうとふあり。仕りんぐうまもあるうり
初こあのようしたうひてうぐまんとすまでこと
やまぐ脇ちらのうちうイ面のうそて脇とう
面。源とこが能ちえうぐ嗜ぬよむうひてう成
ちうつうまうひうれぐぱうまぐばうりうまぐうひわき
ぬふうこうりうせうりくうるづきてごうびとうちふ
しこがれうえくうまとうりうれば嗜ぬ業本とく
しんぐとうこうこうもぬんとうこうこうえうこう
花山院のい道西とうぐます

花山院は法皇宣旨の御使ひ
小舟の宮なりけるとめを御門と
りまをれば徽殿の御門とぞやうやく
ひ申をひきをのひそれぞのはげきうぐの
まる世の中ようぐ
ぬ御ぬ藤壺の宮白ひそぐ庵と人ようたりける
時ちまへ宮あわうぐ藤壺の宮及ま位故命終時
ぬ法ちまへ宮ぬ法経の文とうきうりまをみぐ
いまにうりて五ちんぐ
わとも六月廿二日小蔵人法師と殿道兼ぐ人
しをうて頭殿の萩戸より忍び出させ給ひ御

年十九にて花山院ぬ
と入覚とぞやうの宮仏花げとめくと
紀朝の形智にこ百日ぬこ
知よりて花山院ぬ入て
六年二月八日軍一業
とあらせ給ぬ
出家ありを成晴明が庵
小晴明ぬ
とうぐぬこれ天子
これいうもいの
八幡ぐ小安ぬ

かりぬ時雨ハそらにかへどいそぎ来りて出雲
ほまて家ふみ入てやどりきし頭にかぶりしにそやり方
あくらを語ひかりぬ天文乃理ふ通達しまりくの
ごとしぞのかミ唐の玄宗皇帝天下をおさめて老
年乃世をあしわやかしへ玄宗ハいまだ布衣白屋乃御
時より厳子陵といふ人をむすびしかたりしが旧
そらふ玄宗ふちかつて升よつくそのよろこびいでして御外
し御在ありたじげしと称りあてあそびが
ら御けうのことおさしまり厳子陵がおしと玄宗
来御そへ乃うへよりてをかけく外を御天覧
よりて客星ありて帝座をおかしぬとそうもん

玄宗ハこりおくちかて老てたへてまし
全利ありなふ奏うしその学す通をじして
天下ぶさ　しとおり



三井寺の僧ふ勢の事

あくふ関係の乃智興いそのかとろ武蔵の国
徳乃ちかうに智興疫病ふとうむとそびの乃心
乱し大興苦痛して酒しに堪ずくるしかりぬ
秘法乃おこなひ験験験験針灸のもぐそとけるとい
ひどと立よ志ター名平の逢わもふるげきて嘆
明とうびて初待とうのむ嘆の事りてそのうち稲と
こ為よこれ意来なればいのうとも平愛うるべうぶ
うに戒ひとり乃秘符わりそ人とうく命ふうり
ものわくびいのうと書てかんろ不ととうの智興のまりよわか
くわりぬうろいとまもむようの小稲ものべ戒ふ命ようを

つまそのりたさいごいりうをはじめとして
ものがたりしぬ時のがかやうにやうやうとおい我とも
命よりもたいせつなるものは法師と
てしき十八にすなる信心おんりしがんのやうなる法師
なりふ者ともつかぬ者奥いい今天下仏
法のうつを物也むかしは国家の法城なりしを
師のためにおりて命をすてんとおもひそこなく時
ぬよりてこれをうけたりだうそう大根まるのをんなりて
わざはひをこしらへそこひをくぶるめしやしつて歳七
月をおくりたべくれるものなこそとおもへんあるに法師
一人の老母をもつ母のりこしにしてをとこ

母をれ学をしたいとおもふとかねがねこれを
うんとおもふ人をもつてこれをまもる師のためにおがの
ろふ立ちのぼりぬ世の学問をまなびとうとうとして法師
ひとりまもりてただ山母の
いのちをたすけうとそれをまもりたてまつりて
母をもりくらしやうやうとれ年老て命のをしきもの
しこゆるべきようまもるべきはこれ一人なるをもつて
をくれて命いのちをうしなはんとおもふ
うる是はなりしてこれをあはれとして金をあたへ
師無仏法のこりの男をとりこもとりこもり
もれをよりをげさとぐしんにあるべき師のやまひ

あからんやうもなく思ひわびしかばはらはらとなみだをたれ
そもなにとくちをしきものかなとて晴明をよびて讃を
かざり不動明王の絵像を本尊として母の所労十二
の幣をきらせ香の煙にむせびかへりていのりしが
智興のやまひはいでごころに平癒して其儘そのしく
みな弟子に契りし武者 とかかりけれは
不動尊と念じて身に病をうつさんとくるしみけれ
ばつぎてぬしまつりぬ師の命にかはり我と念じける
年久しく世にながらへざる證空いのちをすてんとて
かの生死のさかひにのぞみしかば證空のやまひ
ひたちに師の平癒を不動尊にいのりける

あるにいはく西明寺の阿闍梨江州のうまれにて
ついらくもせず濃の身にとりて世の人凡夫の動転を
とゞめ證空に母のありし母に孝ありし晴明に奇特を
見不動に感應ありし師弟ともにいのちを全うせし
そのしるしことにふかく信ずべし
厭魅の法をもつて呪詛をなす事
晴明か阿倍仲麿のはじめて物をかきて
つまびらかにしるす傳への中にやう鎮神をたて
くびをかけて血をそゝぎて念じてその身に
晴明をすくひてそのやまひをうつしてかへす
これをみればいのちをすてゝ師の恩をむくいしものなり

とかくまいらせよとのたまへば
さばかりとまるやうにおもつるに
あれどさやうのことまでとうとく
やりかへ給へとあれどもかくのごとく
ゆきさるべきとのたまはせて
兄弟僧都にもあひまゐらせ給
時のいとくづきはてる風ふきあれ
ぬるをうかがひあつまりんとあるべき
しるべきにてまうの系とはきこえ
てものとるべくかたげのめまへすげやうを
きはうの系乃系かたげのうへ